

「アメリカン・モダニスト」の鉄道旅行

秋山 義典

本発表では、3名の「モダニスト」小説家の作品を取り上げて、文学と鉄道の関係について考察する。列車によってつくられる、くりかえされる日常の習慣などに作家の「鉄道」的な視点が隠されている。その視点をほりおこし、注目したいと思う。鉄道があるかぎり、そこに線路が敷かれて、その上を列車が走る。そこには、小説の三者三様の思索が展開している。ドライサーの「鉄道」は、最初、ウィスコンシン州からシカゴに走る。その後、シカゴからモンリオールを経て、ニューヨークまで行く。ニューヨークでは、市内電車が、走る。ハーストウッドは、市内電車の運転士になる。フィッツジェラルドの「鉄道」は、ルイヴィルの街を失意のギャツビーを乗せて進む。途中では、トムやマートルがこっそり、通勤電車で知り合うようになり、最後は緑の中西部にむかう、からし色の電車でニックが、ゆられている。トマス・ウルフのアバターである、ユーージン・ガントあるいはジョージ・ウェバーは、ノースカロライナからセントルイス、ニューヨークへ旅をする。鉄道が駅に到着して、汽笛の音を耳にする。ドライサー『シスター・キャリー』

(1900) がうまれたその年には1900年の全米の鉄道会社で、1224社が576本の列車を運行させた。ほぼアメリカの鉄道網は完成に近づいた。大陸横断鉄道の完成は沿線諸州の牧畜と農業の発展に寄与し、1890年代にフロンティアは消滅することになった。1869年から1910年の間は鉄道の黄金時代であった。1916年には全米の鉄道網は、25万4千マイルに達して、頂点をむかえた。電気鉄道の全盛期となる。フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』(1925) トマス・ウルフ『天使よ故郷を見よ』(1929)『汝再び故郷に帰れず』

(1940)の登場以後、1920年代には自動車の時代が到来、20世紀の最初の30年間ではインターアーバンといわれる通勤電車が都市と近郊を結ぶようになった。鉄道を利用するひとを2つに分けると「用事があって列車に乗るひと」がひとつ。もうひとつは「列車に乗ること自体が目的のひと」である。ドライサーやフィッツジェラルドに見られる「列車に乗るひと」たちが、そこに当てはまる。ハーストウッドは、後悔しながら列車に乗る。ギャツビーは、ディジーの面影をもとめて、ルイヴィル市内電車でゆられる。ニックは、朝4時の始発電車を、ペンシルバニア駅で、眠りながら、待っている。普段、通勤や目的地に行くために、列車にのるひとが、前者であるが、後者は列車に乗ること自体が、列車の魅力とを感じるひとである。列車に乗車すること、移動することをよるこびとする。ホイットマンに通じる鉄道愛である。これがトマス・ウルフにとっての鉄道にちかい。それは、「乗り鉄」とよばれるコンセプトに当てはまるのかもしれない。ホイットマン以後の鉄道の夢は、線路がアメリカをひとつにまとめている。それは「乗ること」の経験である。トマス・ウルフの小説群の「グランド・ツアー(教養旅行)」に引き継がれた。一方、鉄道による高度成長は大都市の形成に引き継がれる。それは、ドライサーとフィッツジェラルドによる都市小説に反映される。ドライサーではニューヨークの市内電車、シカゴからモンリオールまでの乗り継ぎテクニックにみる「時刻表」的才能を確認。フィッツジェラルドではロング・アイランドを走る通勤電車(インターアーバン)の利用にみられる。『グレート・ギャツビー』では、新設のペンシルバニア駅では、近代性を象徴する大型地下駅の登場、ハドソン川を越える最新トンネルを、電車がかけぬける光景を発見することができる。

『シスター・キャリー』の鉄道愛

ハーストウッドとキャリーがシカゴ、モンリオールと逃亡を続けている。最後にニューヨークに逃れてきたときに、キャリーと共にアパートを探す。その場所は78丁目のセントラルパークが見られる五階建ての3階にある。こういうアパートは「鉄道フラット(railroad flat)」と呼ばれる。列車の車両のように並んでいるので、こういわれている。さらに、ハーストウッドは、NYアパートの表札には自分の偽名を「G・W・Wheeler」と名乗る。キャリーも同じようにその名前を利用している。「客車(wheeler)」を言い換えている。27章では、金庫のお金を盗んだ後、このあいだも列車が走り続けているということがこの困難な状況の打開に大いにかかわっていた。店のお金を盗んだ直後のハーストウッドには、鉄道知のスイッチが入った。突然、ハーストウッドは行動的になった。逃走のなかでも、「鉄道の時間はどうだったのか」とハーストウッドはつぶやく。

通りかかったドラッグストアに立ち寄った。最新設備のドラッグストアで、電話を借りて、一気に鉄道の出発と到着時間を計算する。その行動の機敏さには、ハーストウッドの鉄道愛が感じられる。「この娘キャリーは野心の持ち主であり、彼女には、才能がある」と語り手はいう。小説の中では、ハーストウッドは高級バーの支配人だったが、最後まで、支配人以外の仕事の才能がないと思われている。残念ながら社会の現実を乗り

こえることができなかつた。かれは、お金も、才能もない哀れな人間のようにみられている。「自分の立場のみじめさを思い知った」(19章)のがこの男である。ところが、ハーストウッドにもみえない才能が隠されている。かれの鉄道知の高さである。列車の乗り継ぎの俊敏さに、鉄道知の才能があふれているとおもわれる。

『グレート・ギャツビー』の鉄道愛

トムとマートル・ウィルソンは、不倫関係であるが、ふたりの(不倫)男女がなぜ「鉄道」を利用するのか。この疑問に注目すると、不倫の男女がわざわざ電車に乗るのを選択するのは、なにか意味がありそうではないだろうか。車を利用する場合と鉄道を使う場合では本質的な違いが浮き彫りになるのではないだろうか。電車はプライベートな空間を二人に提供しないからである。加えて何の変哲もない郊外電車の車内風景とは第三者との関係で、自己を見定めるようにしいられる。そういう意味ではトムはマートルと一緒に同じ車両に乗らない。「イーストエッグの住人の目がどこにあるかわからないので、マートルは、別の車両に乗った」といわれる。あるいはニックにとっての「シカゴ・ミルウォーキー&セントポール鉄道」は、どうだろうか。ニックが人工的な緑の芝生のロング・アイランドの地から素朴な自然あふれる中西部に戻っていくが、このような西部への帰還には解決策が示されている。近隣までは車で移動することはできる。ニューヨークのプラザホテルには移動可能である。しかし、ミネソタ州までは鉄道を利用しなければならない。ギャツビーもニックも同じ中西部出身であるがゆえに、ニューヨークに向かう途中に立ちはだかる荒地の「灰の楽園」がいかにか破壊的であり、それがかれらを失望させる結末を考えると、かれら中西部人は、いまこそ自分が来た道をたどって、緑の田園に戻るべきであると主張される。

トマス・ウルフの鉄道愛

ウルフは、機関車のモチーフになんらかの憧れや確信を感じ取った。機関車あるいは、鉄道の動きにころをうごかされたこの作家は、みずから列車に乗り、移動することに秘かなよろこびを感じた。ウルフの小説には鉄道による「アメリカの活力」が象徴されているかのようにみえる。列車の旅へのロマンと機関車の神秘をかさねあわせたようなホイットマンのような鉄道の詩人である。ウルフにとっては、列車に乗り、移動することは、大きな意味をもつ。それは、グランド・ツアー(教養旅行)以上の大きな体験である。他者とつながり、交流のときでもある。鉄道旅行は、場所の移動手段ではあるが、ウルフにとっての鉄道の移動は、ある場所から別の場所に運ばれる「逃避」の物理的な移動手段だけではなく、孤独な自己認識をかかえて、その痛みをおぼえながら、同時に、人間とのつながりをもとめる時間と空間である。主人公は、孤独をかかえて悩む。そこから、走行する列車のなかの人々との、一時的ではあるが、自分の孤独をいやしてくれる契機がおとずれる。登場人物は、抑圧的な家族関係や不安定な恋愛感情がもたらす人生の閉塞感におこまれている。しかしながら、かれらは、ときに幻滅しながらも、挑戦的で、理想を追求する。そこに鉄道列車は、信頼される友のように、感情的なやすらぎをあたえてくれるような存在にみえる。

鉄道があたえる「精神の均衡」

「アメリカン・モダニスト」の鉄道旅行は、鉄道があたえるふたつの経験を示唆する。わたしたちも最寄り駅では、なじみの光景がわたしたちをおちつかせてくれるときがある。たとえば、改札を出たときに感じるみなれた商店街のようす。駅とむすびついた日常がひとびとにやすらぎをあたえてくれる。鉄道は、その土地に暮らしている人々のぬくもりをつたえているかのようなのである。これは列車に乗ったニックがミネソタに戻ってきたとき、感じたことに近い。ギャツビーが、ディジーとの思い出を追体験したいとき、ルイヴィルで市内電車にゆられるときである。朝4時のペンシルバニア駅が、ベンチでまどろむニックをつつみこんでいる。ジョージも故郷に帰りがっている。一方で、鉄道は、お金を払うと、だれでも乗ることができる。車両には、ことばをかわすことのないまったくの他人と同じ時間と空間を共有することができる。まさに不特定多数の他人のなかの孤独な時間を楽しむことができる。登場人物たちは、単調な日常生活から逃れたいとき、もう一度、人生をやり直したいとき、列車を選んでそこにのりこんだのが、かれら、ハーストウッドであり、キャリーであり、ジョージ・ウェバーとユージーン・ガントであった。